

くりかえし

自分のことで恥ずかしいのですが、私は野球が大好きです。どうしてこんなに好きになって了ったのか、よくわかりません。「三者凡退」を「三者ごんたい」と聞きまちがえて、それを信じて居た人なのですね。

プロ野球も好きですが、それにもまして好きなのは高校野球です。

幼稚園も夏のお休みに入り暫くすると、甲子園の高校野球がはじまります。さすがに夏の休みもたけなわと云う頃で暑いこと暑いこと、あぶら蟬でしょうか、「ミンミンミンミン」としぼり出されるような鳴きごえを耳にしながらのテレビ観戦、見ている方も暑いのなら、やっている甲子園もカンカン照り、砂ほこりと若人の熱気がつたわって来る、この様な光景の高校野球が又今年もやって来たのです。

今年は何でも第五十七回だそうですから、その歴史は古く、絶えることなく繰り返されて来たのも、それには何かの魅力があるのでしょうか。



高木良子

日本全国、その地方を代表して来た選手には、それぞれ皆違った味があります。北海道の選手には、何か夏の短い様子が顔色にうかがえるし、南の地方の選手は、猛暑の中でも平気ですといわんばかりのたくましさが見られます。入場式、行進、たくましい腕、足、まだここにはこの様な若人が居るのだと、ほんとうにたのしいことだと思えます。近頃はユニホームなど、なかなか整って来たよう、何回か出場ของทีมの中に、プロ野球なみのスタイルの学校もあるかと思えば、初出場とあって、必要以上のものは身につけませんと云う質素なチームもあります。この学生らしい、素朴な様子は何かホットしたものを感じます。

いよいよ試合開始、バッターが頭にあわない大きいヘルメットを手に、審判員にあいさつをする姿、デットボールを受けると却って恥じいるかのように、がまんをして駆け出して塁に出る姿、プロの選手にはあまり見られない姿です。デットボールを出してしまったピッチャーは、帽子をとり心をこめてあいさ

つをする、どれもこれも一挙一動がほんとうに清らかで、この暑さもふきとんでしまいます。あたりまえのことといえ、それまでですが、何か感激ひとしおの気持になるのも不思議なことです。

こんな場面もよくあります。高校生の場合はピッチャーは大てい一人です。二人三人と予備のいる学校は珍らしいことですから、調子がよい時はいいのですが打たれ出すともうかわりはありません。打たれても打たれても投げなければならぬ投手、そこには、くだけてはならない気持がむくむくと生まれてくるに違いありません。

野球は自分一人では出来ない。九人の選手がお互いにはげまし合ってこそ勝てるのです。そこにはいかにいられない友情、一人一人の責任感もわいてくることでしょう。このあつい思い出はこれからの人生に本当に役に立つに違いありません。私は本当にこの若人がうらやましくて仕方がありません。

今年はず志野高校が優勝しました。又来年も、又来年も新しい学生がこの尊い経験をして又去って行くのです。そして毎年くりかえしたのしみに待つのは私ばかりではないと思いません。

* * *

もう一つ忘れ得ないくりかえしがあります。それは八月十五日の終戦の日です。毎年この式典には両陛下が御臨席になられることも忘れられないことでございます。

あの昭和二十年八月十五日、当時私は日光山門御用邸（現在東照宮の隣り）で迎えました。

義宮様（現常陸宮）のお相手で丁度おそばに居りました時でした。陛下の終戦のおことばを当直の者五、六人とラジオの前でうかがいました。戦争は終わったのです、でもそれは敗戦なのです。つかれ果てた五、六人の姿は無言です。「元氣を出さなくては駄目です」と大人をばげまされたのは、たしか初等科三年生でいらった義宮様でございます。

それからの日本は、ほんとうに容易なことではありませんでした。私もそのおことばのように元氣を出して、日本中が元氣を出して今日の日本になったのだと思います。

毎年くりかえされる終戦の式典、荘重な式典をテレビで拝見する度に、この戦争だけはくりかえさないで下さいと、心から祈らずには居られません。

（学習院幼稚園）